

4 石橋の宝庫



一村 一博
ICHIMURA Kazuhiro

美里町石橋愛好会会長

日本の石橋は、その多くが江戸から大正時代に架けられた。現存するアーチ石橋のうち多くが九州に現存している。石材の起源は阿蘇の噴火であり、その活用の歴史は古墳時代までさかのぼる。石材となる溶結凝灰岩の活用と土工集団、さらには石橋保護の活動について紹介する。

日本の石橋

現存する日本のアーチ石橋は約1,800基です。その内95%が九州に存在していて、大分県約500基、鹿児島県約450基、熊本県約320基、宮崎県約160基、長崎県約150基、福岡県約70基等になります。又日本一長い橋は大分県中津市本耶馬溪町の山国川に架かる8連の耶馬溪橋で、スパンと呼ばれるアーチの長さが日本一は大分県豊後大野市の大野川に架かる轟橋です。

最古の橋は長崎市の中島川に架かる1634年完成の眼鏡橋と云われていますが、沖縄県那覇市の首里城公園北側の円鑑池には、1502年にリブアーチ式（縦軸積み法）で架けられた天女橋があります。中国が明の時代、琉球と交易のあった頃に伝わったと云われています。沖縄の石橋は殆どがリブアーチ式であり他の地域ではあまり見ることはできません。又眼鏡橋は日本に多

くにあるセグメント式（横軸積み法）の中では最古と云われていますが、その時代は長崎県以外に殆ど伝播されませんでした。

熊本の石橋

熊本県の石橋は各分野でなかなかトップには出てきませんが、三つの特徴があります。

一つ目は殆どが単一アーチであり、山間部に多いのが特徴です。若い人ならひとつ飛び出来るほどの川幅に架けられた石橋も数多くみられます。おそらく高度な専門知識を持った土工だけでなく、近隣の農民なども架橋の手伝いをしながら知識を得たことでしょう。土工のすそ野の広さを物語っています。

二つ目は長く大きな橋などは明治後期から大正、昭和初期に架橋されています。人力に頼るしかなかった時



写真1 春の霊台橋



写真2 福岡県最大の単一アーチの洗玉橋

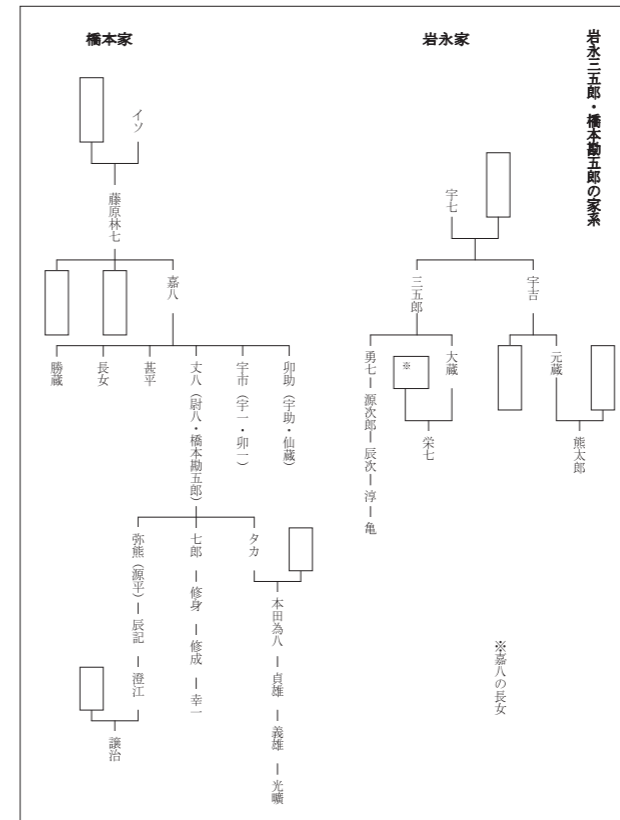


図1 岩永三五郎・橋本勘五郎の家系図

代に熊本における大小の石橋の架橋は、日本の石橋架橋のベースになったことでしょう。

三つ目として熊本県美里町に全国の石橋の中でも象徴的な霊台橋があります。阿蘇近郊を源流とし、外輪山の南側を流れ有明海に注ぐ、県内屈指の大河・緑川の船津峡に架けられた魅惑的な石橋です。1847年の架橋当時は全国で最大の単一アーチ橋でした。アーチがちょうど半円形をしており、アーチ造り石橋の教科書とも云

われています。

架橋に携わった土工は、「肥後の石工」と云われる藤原林七を祖とした種山石工集団です。これは長崎の武士だった林七を祖とした直系の子供や孫達を中心にした石のスペシャリスト集団です。種山とは今の八代市東陽町で、当時は種山村と云っていた肥後の石工発祥の地になります。

そして、この石工らによって、県内山都町の通潤橋は勿論、鹿児島県では岩永三五郎による西田橋他、福岡県では橋本勘五郎による洗玉橋他、東京でも同じ橋本勘五郎によって万世橋他へと、架橋技術が伝播していきました。

阿蘇の恵み

阿蘇は東西約18km、南北約25kmのカルデラを有する世界最大級の活火山です。カルデラの中には今も活動中の中岳を有し、道路や鉄道が走り約5万人の人々が生活を営んでいます。又、阿蘇エリアには多種多様な魅力を求めて年間約2,000万人の人々が訪れます。

阿蘇は、先阿蘇火山活動の後、4度の大噴火の記録があります。それらは九州の中北部、山口県の一部、そして四国の一部を大火砕流で覆いました。堆積した火砕流は溶結凝灰岩となりました。

熊本県は南北と東に山があり、コの字になった西側は有明海です。偏西風に乗った湿った風は、阿蘇に全国屈指の降水量をもたらします。この地形が阿蘇の恵みの原点と考えられます。阿蘇の恵みは阿蘇エリアに限らず、熊本県は勿論、大分県、福岡県、宮崎県など広範囲に及び、以下の特徴があります。

・九州の大河の源流は阿蘇地域に多くあります。例え



図2 阿蘇の4回の大噴火による火砕流（溶結凝灰岩）分布図

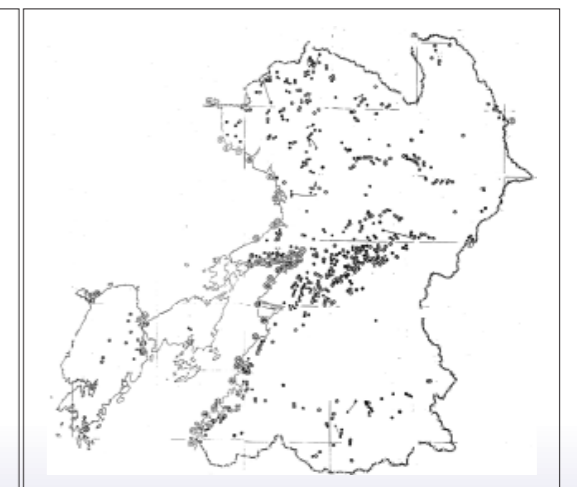


図3 熊本県の石橋分布図



写真3 溶結凝灰岩を加工した岩戸山古墳の石人(福岡県八女市)



写真4 溶結凝灰岩を五ヶ瀬川が侵食した高千穂峡(宮崎県高千穂町)

ば大野川は別府湾、五ヶ瀬川は日向灘、筑後川・菊池川・白川・緑川は有明海に注いでいます。そして大河は流域に地域文化を育んできました。

- ・阿蘇の草原は全国一の規模を誇り、独特の生態系を構成し希少種も見られます。又、阿蘇の特産物である赤牛の放牧地としても有名です。
- ・全国屈指の降水量は地下水となり、いたるところで湧水となります。熊本地域では蛇口から出る水は殆どが地下水です。
- ・溶結凝灰岩は悠久の時を経て雨の浸食を受け、美しい渓谷や滝が存在しています。例えば、高千穂峡(宮崎県)、菊池渓谷(熊本県)、遊水峡(熊本県小

国町)、原尻の滝(大分県)、鍋ヶ滝(熊本県)等です。

- ・溶結凝灰岩が石材となり、石橋以外にも多種多様の石文化が育まれました。それらは、大分県岡城の石垣、福岡県八女市の石灯籠、奈良県橿原市植山古墳の石棺、大分県白杵市の磨崖仏等です。

石橋の分布は溶結凝灰岩の分布と重なります、それは重機などがなかった時代というのも理由の一つに挙げられますが、橋の必要な場所に石材となる溶結凝灰岩が豊富にあったからです。何よりも溶結凝灰岩は比較的やわらかく、細工が容易なのが特徴です。

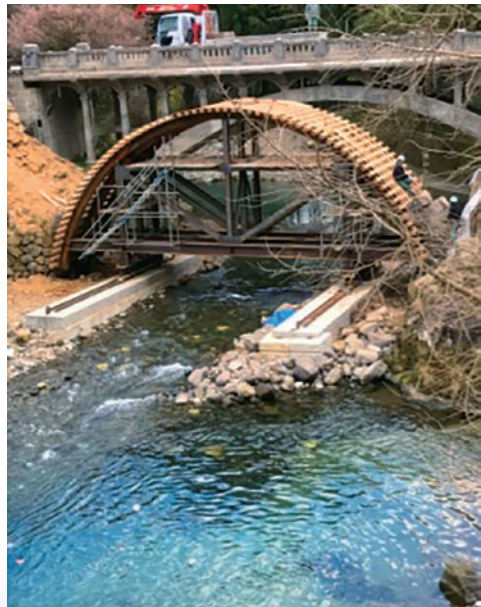


写真5 熊本地震により半壊した二俣福良渡の解体復元工事



写真6 維持管理がされず輪石が一部崩落し崩壊寸前の桑野橋(熊本県美里町)

多種多様な阿蘇の恵みの中でも石橋は特別です。石橋とそこに流れる川の水とのコラボレーションで美しい景観を生み出します。架橋当時、その場所は人々にとって往来の難所でした。阿蘇の大噴火が造ったその難所を、大噴火による火砕流が固まった溶結凝灰岩で人々は克服してみせたのです。

日本には世界の活火山の1割弱があると云われています。それらの噴火は人類だけでなくあらゆる生物にとって脅威です。しかし、多くの恵みも与えてくれます。石橋には、ピンチをチャンスに変えてゆく先人たちが教えてくれた人生訓を感じます。

困難な維持管理

全国の石橋の中には、国指定の重要文化財や自治体指定の石橋も多くあります。指定文化財の石橋に関してはそれなりの管理もされています。しかし、地域にもよりますが、管理の行き届いていない石橋が多いです。熊本県の石橋は、山間部に多いのが一因のようで、明治時代には600基以上あったと云われていますが「いつの間にかなくなった」と高齢の地元住民からよく聞かれます。

経済成長に伴う価値観の変化や老朽化による崩落撤去、気象変動による降水量の増加、人工林の大木化による流木被害など原因は様々です。今でも崩落寸前や放置されたままになっている石橋がいくつかあります。修繕、復元、移設するにしても資金や石工の問題などが生じます。

日本一の水路橋である通潤橋や太陽の位置によってハートの影が出来る二俣福良渡等は、熊本地震で災害にあいましたが、指定文化財であるため行政からの支援が得られます。しかし、それ以外の被害を受けた石橋の復旧は困難です。行政から見て、地域の文化、土木遺産である石橋への意識の問題かも知れません。

課題

石橋の維持管理は課題山積です。熊本県においては緑川水系に約140基、菊池川水系にも約100基の石橋



写真7 2016年6月の洪水で輪石だけが残った下用橋(熊本県美里町)



写真8 標柱の設置作業

が現存しています。通潤橋を含め、架橋後200年経った今でも現役で使われている水路橋も多くみられます。そんな中、阿蘇の南側に位置する美里町には36基の石橋があります。多種多様な石橋は「石橋の博物館」と表現しても過言ではありません。

昨今、「地域創生」や「地域おこし」と云う言葉をよく耳にします。石橋は地域の文化であり土木遺産です。一部地域ではこれらを地域おこしに活用されていますが、決して万全ではないのが現状です。全国に石橋が分布する中で、多様な観点から「美里の石橋」が地域創生に活用されていない現実に歯がゆささえ感じていました。

そのような現実を踏まえ、2015年に「美里町石橋愛好会」を設立しました。36基のうち10基は指定文化財ですが、それらも十分な維持管理がされているとは思えません。藪の中にあたり草木が覆い茂っていたりで、地元の人も気がつかないのもいくつかありました。2016年6月の豪雨では1基が完全流失しました。他にも数基に被害が見られ、自然災害を恐れているのが現状です。

2017年度は会員の奉仕活動や行政からの支援等で、標柱の設置や、公共施設での写真コンテストの展示等を行いました。自治体は地域おこしの「目玉」に苦労しています。阿蘇の恵みを受けた地域の遺産を活用できるように、文化活動、教育活動、周知活動を通じて地域創生にお役にたてればと云う想いです。

<参考資料>

- 1) 霊台橋—最高の美しさに秘められた幕末の黄金比—一村一博 2011年 熊本日日新聞情報文化センター

<図提供>

- 図2 出典:小野・渡辺(1983)阿蘇カルデラ 月刊地球 44, 73-82
- 図3 日本の石橋を守る会会長・上塚尚孝